

# 夏休みの夜、女教師の彼女は嘘 をやめる

同年代の女教師が、秋の夏休みで距離を縮める——凜とした彼女が信頼した相手にだけ委ねる落差

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

## プロローグ

彼女は静謐でありながら、どこか焦燥に満ちた存在だった。祭りの騒ぎが収まったばかりの夜、広々としたLDKにはまだ花火の香りと薄明かりが残っている。陽介が帰宅した時、彼女はソファに深く沈み込んでいるだけだったが、その姿勢からは「ただ休もうとしている」というよりは、何か巨大なエネルギーを貯め上げているような重さがあった。偶然の同居とはいえ、この夏休みも後半へと差し掛かる秋の気配を感じさせぬ部屋で、二人の距離感は物理的な近さに止まらず、視線の交錯だけで火花を散らしていた。

美咲が目を起こしたのは、陽介が彼女の膝の上に乗るやいなやだった。彼女の指先は涼しく、しかし微かな震えと共に陽介の胸元を撫で回す。そこには社会人としての余裕と、女教師という役柄から解き放たれた本能が入り混じった独特の質感があった。「やっと戻ってきたね……」 e e 声は低く、普段使われるような整った言葉遣いではなく、喉奥から絞り出されるような渴いた響きを帯びていた。陽介はその声を聞き、彼女が自分の存在をどのくらい必要としていただろうかと考え込んだ。

「いつもならもっと早く寝ていてくれるのに」

「お前の帰りが、まるで明日が来るかのようだからな」

二人の間で空気が軋む音がしたわけではないが、何かが弾みそうになる予感がした。その瞬間、部屋の照明が薄暗くなり、窓の外から漏れる街明かりだけが二人の肌を照らし出す。彼女はゆっくりと立ち上がり、陽介へと歩を進める。その動きには計算高さがありながら、どこか原始的な捕食獣のような緊張感が含まれていた。

『――これが、私たちの現実ではない』

美咲の唇を噛んだように見えた一瞬、世界観が歪められる。これまでの穏やかな同居生活、あるいは単なる親密さの延長線上にあるこの夜は、突然の熱気によって彩られ始めた。彼女は陽介の首筋に顎を当て、温かい吐息が皮膚の上を滑っていく感覚を存分に味わうようにした。その手のひらは汗ばんでおり、指先からの伝導熱が陽介の体を這っていった。

「何か……異変でも起きてるのか？」

陽介が問いかけると、美咲は少しだけ微笑みを浮かべた。それは愛嬌というよりは、獲物を狙う狩人らしい狡い笑みに見えなかった。彼女が再び動き出した時、今度は服を緩めるような小動作ではなく、より直接的で、かつ慎重な接触だった。ソファのクッションに埋もれたまま、あるいは床に降り立ったまま、二人は互いの体温を感じ合っ

いた。秋の涼しさとは裏腹に、部屋の中は蒸し暑さに包まれ、そこには支配と服従のゲームが始まる兆しがあった。

会話は短く、むしろ沈黙の方が重圧として迫り来る。美咲の瞳から溢れるのは、単純な悦びというよりも、この男を自分のものにする確信だった。「陽介」と呼ぶ彼女の声は、まるで名前を奪い取るかのように艶々していた。彼女の唇は柔らかいが、触れ合うたびに陽介の呼吸を整えさせるほどに激しく動く。唾液の甘さが空気を湿らせ、頬っぺたの皮膚感覚だけが現実であることを意識させた。

中盤へと進むにつれ、彼女はかつての冷静さを徐々に失いつつあるのが見て取れた。社会人としての体裁なんていったものは、この祭りの後、この不規則な時間に溶け始めていたのだ。彼女は陽介の視線を追うようにして、彼の腕に手を回す。その手首からは冷たい香水の香りが漂い、汗ばんだ肌との対比が官能的極みであった。

「もっと近くで……感じて」

そんな囁きが耳元に届くと、陽介は思わず腰を上げようとしたが、彼女の導きによって再び元の位置へ押し戻されたような錯覚に陥る。そこには征服欲が込み上げており、彼女こそがこの部屋、そしてこの夜の王権を握ろうとしている気がした。

行為そのものではなく、互いの存在意義を再確認するプロセスそのものが快樂だった。美咲は常に陽介よりも一歩先を行く立ち位置を取っており、まるで彼らを舞台にした演技のように振る舞っていた。でも、それは偽物ではない。二人の足並みを揃えるための慎重な調整が続く中、何かが決定的な変化を遂げそうな予感が胸を締め付けた。美咲が息を切らしながら、陽介の喉元へと口移しをするような仕草を取り入れた瞬間、これまでの静寂が破られる音が聞こえたかのようだ。

彼女は完全に陽介の所有物になりつつあり、それを知りながら彼はまだ抵抗もできない。秋の夜風に揺れるカーテンが、室内の熱気を少しだけ和らげるが、それでも二人からは逃れられない熱さが続いていた。最後に残るのは、美咲の唇から溢れ出る微かな吐息と、陽介が抱えきれそうになった感情の奔流だ。

『……まだ、始まったばかりか』

美咲が呟いた言葉だけが、この濃厚な夜の只中を表していた。彼女はその瞳で陽介を捉え込み、次なる展開への期待感、あるいは焦燥感を込めて、再び彼の心を操ろうとしていた。



——ここから先は製品版でお楽しみください——